

# 文教大学大学院言語文化研究科 博士学位授与概要

申請者氏名	賈鵬飛 (カ ホウヒ)	報告番号	甲第3号
学位の種類	博士 (文学)	学位授与年月日	2019年9月20日
学位論文題目	日本語：張我軍と日本語教育—1930、1940年代の中国大陆における「日本国籍」台湾人による日本語教育 英語：Zhang Wojun and Japanese-education: Japanese-education in Mainland China(1930s-1940s) conducted by Taiwanese with “Japanese nationality”		
審査委員	白井啓介 (主査：文教大学)、加納陸人 (副査：文教大学)、蔣垂東 (副査：文教大学)、川口良 (副査：文教大学)、田中寛 (副査：大東文化大学)		

## 1. 論文内容の要旨

本研究は日本統治下の台湾で生まれた「日本国籍」台湾人、張我軍による日本語教育に関する研究である。張我軍は文学者として、特に1930年代の台湾新文学運動の先駆者として知られるが、台湾新文学運動の関与は2年ほどなのに対し、日本語教育に関与したのは、実に16年に及ぶ。これまでの張我軍の研究では、台湾新文学運動、文学者、翻訳家としての研究が中心であり、日本語教育実践を中心とした研究論文は、現時点では1編に過ぎない。しかも、中国の日本語教育史における張我軍の業績を概観したのみで、その日本語教材の内容、日本語教授観及び戦時中の日本語教育実践については、具体的に言及していない。

本研究は張我軍研究の現状を踏まえ、3つの研究課題を設定している。一つ目は中国の日本語教育史における張我軍の業績と位置づけである。二つ目は日本の植民地統治地出身者としての張我軍が日本語教育の道を辿った要因である。三つ目は日本語教育に視点を置いた張我軍の主体性である。これらの課題を達成するにあたり、序章、終章を含め7章に分け考察した。

本研究は「序章」(pp.1-21)、「第1章 張我軍の生涯(1902~1955)」(pp.21-72)、「第2章 中国の日本語教育史における張我軍の業績—多種類の日本語教材と雑誌『日文與日語』—」(pp.73-112)、「第3章 張我軍の日本語教授観とその影響」(pp.113-153)、「第4章 張我軍の日本語教育と反植民地統治活動との関連」(pp.154-179)、「第5章 日本語教育からみた張我軍の主体性」(pp.180-203)、「終章 結論と今後の課題」(pp.204-218)、「参考文献」(p219-235)、「付録」(p236-244)により構成されている。

序章では研究背景と問題の所在について触れ、張我軍研究の現状と問題点、研究課題と研究方法、研究の構成について述べ、用語の定義について明示した。

第1章は張我軍の生涯における3つの節目に照射し、「北京定住前の時期」(1902.10~1926.6)、「戦前の北京定住時期」(1926.6~1937.7)、「戦時中の北京定住時期」(1937.7~1945.8)、「台湾帰郷の時期」(1945.8~1955.11)の4つの時期に分け、各時期の活動における関連性を考察した。その中で張我軍が貫いた思想や日本語教育に携わった外的要因や内的要因を探り、戦前と戦時中、張はどのような日本語教育実践に関与したのかを探求した。筆者は各時期の活動の関連性を検証したうえで、「反植民地統治」が一生を貫く思想であることを明らかにした。張我軍は1920年代の台湾民族運等の影響で民族意識を覚醒し、日本の植民地支配に反抗する道を辿ったが、1930年代における言論統制や「日本語ブーム」などの外的要因により、日本語教育を反植民地統治の新たな手段として、自身の思想や理念を伝えようとしたことを解明した。また、これまで張我軍研究の中で欠落した部分や間違いがあり、1次資料を検証することにより、修正し補足した。

第2章は中国の日本語教育史における張我軍の主な業績である日本語教育関係の著述について論述した。本章では1930年代までの中国人の日本語学習史を概観し、張我軍が編集した『日文與日語』(全24冊)及び日本語教科書11種類23冊を対象に、作成背景、構成的特徴、教材間の関連及び作成理念を分析した。具体

的には『日文與日語』の全 24 冊を詳細に分析したが、主要な内容である「日本語関係の論述」、「日本語講座」、「答問欄(問答コーナー)」の中で、張我軍の論述が一番多いのは、「日本語講座」であったことを明らかにする。「答問欄」は、日本語学習における疑問や難点を解決する目的で設置されたもので、自修学習者からの疑問点に回答する場となった。「日本語講座」は初級、中級、上級の 3 段階に分かれ、各レベルの学習者が利用できるように、各号の内容は易から難へと工夫されているのが特徴である。『日文與日語』は雑誌であるが、張我軍の日本語教育観を発信する場でもあった。また、同時代の日本語雑誌と比べ、日本語教材としての性格が強く、読者のニーズに応えたことが長く続いた要因であると結論づけた。

さらに、張我軍の教材は各教材がバラバラに存在しているのではなく、相互に関連性があることを究明した。張我軍の教材の特徴として、「自修教授両用」と「完全自修用」に分けられていることを大きな特徴と指摘する。自修教授両用は『日語基礎読本』であり、『日本文法十二講』は、副教材として作成された文法書であるが、その後、『日語基礎読本』は教室での使用に、よりよく対応できるように文法説明が削除され、その代わりとして、『日本文法十二講』の増補版として『現代日本語法大全』が副教材として作成されている。完全自修用教材としては、初級段階の『標準日文自修講座』、中上級段階の読本『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』、『高級日文星期講座』、『対訳詳注日本童話集』があり、自修者用と通学者用のニーズが異なることに配慮して、張我軍の教材は系統的に作成されていることを明らかにした。

第 3 章では、張我軍の日本語教授観とその影響について論じた。本章ではまず、張我軍の日本語教授観を探るうえで重要な『日文與日語』及び日本語教材にみられる教授方針や日本語教授法・学習法に関する論述を詳細に分析した。張我軍は読解力の養成を教授目標としたが、その中で張が提唱した「文法+読本」の日本語教授法について考察した。さらに、『日文與日語』に掲載された日本語読本を取り上げ、初級読本、中級読本、上級読本に分け分析を行なった。初級段階では張我軍が自ら文章を執筆し、難易度によって文法・文型項目を読本に融合させており、中級段階では主に日本の国語読本から平易な文章を選択し、上級段階では、読解力の応用に対応できるように、日本の文学作品や論説文から採録したことを確認する。また、発音教授も軽視せず、教学の蓄積に伴い、その教授方法も改善し、学習者の読解力の養成のために、文の構造分析、中国語訳や図解などを取り入れており、張我軍の日本語教授観の一端を明らかにした。

さらに、本章では北京近代科学図書館の日本語教科書の作成過程の検証を行ない、張我軍の日本語教授理念や日本語教材が、華北淪陥(被占領)区の日本語教育に影響を与えた可能性が高いことを指摘した。

第 4 章では、張我軍の日本語教育と反植民地統治活動との関連を論述した。これは張の日本語教育に携わった内的要因を解明する部分にあたる。それを解明するにあたり、張我軍が執筆した日本語教育観の論述や日本語教材にみられる文章を分析し、張の日本語教育と従来の反植民地統治活動との関連性について考察した。具体的には『日文與日語』や日本語教材の中で張我軍が表出した思想の論拠、張が日本語教育に関わった動機及び植民地経験における反植民地活動との関連についての探究である。その結果、日本語習得の目的が欧米学術文化摂取にあるのが当時の潮流であったのに対し、張我軍はこれだけにとどまらず、日本語教育を抗日の手段として取り入れ、中国の消極的な態度を変え、台湾の日本統治離脱を最終目標に置いたと論述する。このことは、日本語が反植民地統治の武器であり、同時に新思想、新知識を獲得する手段であるという植民地経験の中で生まれた日本語観がその要因であるとする。

第 5 章では、日本語教育の視点から張我軍の主体性について論述した。戦時中、日本の国策映画『東洋平和の道』への関与や偽北京大学、「大東亜文学者大会」への参加など、日本側に協力したことにより、この時期の張我軍の主体性が問われている。張我軍は台湾の公学校で日本語を学んだことから、まずは当時公学校で使用された日本語教科書『公学校用国民読本』(巻 3~巻 12)に盛り込まれた、皇民化教育や忠君愛国などの「同化」と関連する内容を詳細に検証した。その上で、張我軍が作成した日本語教材では、日本の国語読本(『尋常小学校国語読本』、『小学国語読本』等)から多くの文章を採用しながら、同化教育に関連する内容を巧みに取り除いていることを解明した。さらに、戦時中の張我軍の言説や日本語教育の内容を考察し、日本側の視

点と異なる視点で主体性を保持していたと結論づけた。

終章では各章の考察内容を踏まえたうえで、本研究の 3 つの課題をめぐりまとめた。さらに本研究の不足点を分析したうえで、今後の課題を提示した。

末尾に本研究において引用、参照した文献を日本語参考文献、中国語参考文献、参照 URL、参考教材に分け提示し、さらに付録として「付録 1 張我軍の著作」、「付録 2 張我軍の翻訳作品」、「付録 3 張我軍年表」を添付した。

本研究の中核をなす部分として、第 1 章と第 2 章は、「張我軍の日本語教育実践」(『文教大学言語文化研究科紀要』第 4 号、2018 年、pp.1-30)を大幅に加筆修正したものである。第 3 章は、『『日文與日語』から見た張我軍の日本語教授観』(『文教大学大学院言語文化研究科紀要』第 5 号、2019 年、pp.1-31)、口頭発表『『日文と日語』から見た張我軍の日本語教育観とその影響』(2017 年度日本語教育学会春季大会、早稲田大学)、口頭発表「北京近代科学図書館編日本語教科書の作成過程における再検討」(2018 年度日本語教育史研究会、東洋大学)をもとに加筆修正したものである。第 4 章は、「張我軍の日本語教育観と植民地経験との関連」(『新世紀人文学論究』特集号—日本語教育史から見た日中戦争、pp.175-190)を大幅修正したものである。

## 2. 審査結果の要旨

本研究は、従来台湾新文学運動の騎手、翻訳家として焦点が当てられることが多かった張我軍の日本語教育実践者としてのもう一方の重要な側面に光を当て、張我軍の功績と当時の日本語教育の実像を解明した日本語教育史研究である。

張我軍研究の日本語教育実践者としての研究は、これまで中国の日本語教育史における業績を概観したのみで、また、戦時中の張我軍の主体性については、日本語教育の視点から研究されたものは存在しない。本研究では、張我軍の編集した『日文與日語』(全24号)、張が作成した日本語教科書11種類23冊をはじめ、散逸している入手困難な1次資料を発掘、渉猟することによって、新たな張我軍像を創出したといえる。同時に、中国の1930年代、40年代の日本語教育史研究の新たな地平を拓くうえで有意な発掘と解明が多く、高く評価されるものと判断する。各章で評価される点は以下の通りである。

第1章は張我軍の生涯について論述した部分であるが、これまでの張我軍研究は、張の各時期のつながりやなぜ文学者から日本語教育の道を進んでいったのか、ほとんど検証されてこなかったが、筆者は各時期を丹念に分析、考察し、その足跡を丁寧に跡付けて航跡を描き得ている。本章で評価できることは、張我軍の生涯を貫いた思想が「反植民地統治」であることを実証的に提示し、また、1次資料を検証することにより、従来の張我軍研究を修正し補足したことである。戦時中の張我軍については、日本語の専門家から轉身し、再び文学者として活躍したという言説が主流を占めていたが、張我軍が、戦時中も偽北京大学や北京近代科学図書館、教育総署直轄編審会、華北日本語研究所など、華北の日本語教育の中心的な機関に関与していたことを確認したことは、今後の張我軍研究に示唆を与えるものとなるであろう。

第2章は張我軍の日本語教育の中でも主要な業績である『日文與日語』(全24冊)及び日本語教科書11種類23冊の内容と構成的特徴を論述した部分である。全体を詳細に分析し、その内容と構成的特徴が過不足なくまとめられている。本章の考察により、張我軍の教材は学習者によってニーズが異なることから、「自修教授両用」と「完全自修用」に分け、多様な学習者と教師のニーズに対応できるように配慮した教材であり、張我軍の日本語教育観の最大の特徴であることを究明した。このことは、中国の日本語教育史の中で、これまでほとんど論究されてこなかった、張我軍の日本語教育研究の新しい部分であり、張の日本語教材の位置づけを明確にしたものとして高く評価できる。

第3章は張我軍の日本語教授観とその影響について述べた部分であるが、『日文與日語』と張我軍が作成した日本語教材を丹念に分析し、筆者は張我軍の日本語教授法として「文法+読本」がその根幹であると解明する。そして、この教授法により、既存の日本語学習法・教授法を踏まえ、効率性や学習者の知的興味に配慮し、文法と分立していた当時の現状を改善し、学習者のニーズに対応でき、読解力の向上につながる有効な教授法であると結論づけ、張我軍の日本語教授観を明らかにした。さらに、先行研究では未解明であった、華北淪陥(被占領)区の初期に広く使用された日本語教材である科学図書館編『初級日語』と『高級日文』がどのような背景の下で作成されたのかについても探究を進める。筆者は張我軍教材と『初級日語』と『高級日文』の課の内容、課についての中国語訳、「教授参考」を詳細に照合、分析し、その結果、張我軍教材から採録した可能性が高いと結論づけた。

第4章は張我軍の日本語教育と反植民地統治活動との関連を論述した部分である。張我軍は、当時の言論統制や「日本語ブーム」などの外的要因により、日本語教育の道に携わったと考えられるが、一方、反植民地統治活動の中で、日本の植民地出身者のスティグマとされる日本語をなぜ拒否しなかったのかという疑問が残る。本章はその内的要因の解明に努めた。『日文與日語』や日本語教材の中で、張の思想を表出した内容を詳細に分析し、内的要因として、日本語は張我軍にとって植民地統治に反対する武器であり、新思想を獲得する手段と考えていたことを明らかにした。このことは、この時代の日本語教育を追究するうえで、新たな視点を与えるものである。

第5章は日本語教育の視点から張我軍の主体性について論じた部分で、戦時中、日本側に加担したことか

ら、その主体性が問われなければならなくなっていた。文学や翻訳などの視点で主体性を論じたものは散見できるが、日本語教育の視点から主体性を論じたものは、本研究が最初である。論者は張我軍が学んだ公学校時代の教科書と戦時中の言説、日本語教育の内容を分析し、皇民化教育や忠君愛国などの「同化」と関連する内容について比較対照した上で、同化教育と関連する内容を除外していることを摘出し、日本側と異なる視点を持ち得たことによって、張我軍が主体性を保持していたと結論づけた。

以上のことから、研究課題として設定された、日本語教育史における張我軍の業績と位置づけ、張が日本語教育の道を辿っていった要因、さらに日本語教育に対して独自の視点を持ち続けたところに張我軍の主体性が存することを解明しており、綿密な分析と考察により導き出された結論は、十分に研究成果として達成できたものと認められる。

しかし、以下のような不足点や未解決課題も存在している。

本研究は人物に焦点を当てた研究であり、どうしても張我軍自身の側に即した張我軍像の塑造に陥る傾向が避けられない。本人の言説以外にもより多くの他者の視点を取り入れ、客観性を高めることが求められる。張我軍の作成した日本語教材や教授法についても、同時代の外国語教育分野（たとえば英語教育の Harold Palmer とかその方法を日本語教育に応用した長沼直兄とか）の方法論を視野に置き、張我軍がこれから何らかの影響を受けたのかどうかの吟味が十分行われているとは言い難い。さらに、中国で同時期に出版された多種類の日本語教科書（たとえば上海世界書局「日語学習叢書」等）との比較を通し、張我軍の日本語教育の独自性ないしは共通性を浮き彫りにさせることができれば、日本語の発音図や社会主義思想が張我軍独自のものか、どれが反植民地統治思想と関係しているのか等をより一層明らかにできたはずである。

張我軍は台湾の公学校で日本語教育を受けたが、ここで母語話者と同じように日本語能力を身につけたとみなせる根拠について、もっと具体的な論拠が必要である。また、5章で扱った「主体性」とは何か、定義を提示するとより説得力が増したであろう。さらには、本章で扱った公学校の日本語教科書は初期の段階からグアン式教授法の影響を受けていることが明らかにされているが、これと張我軍の教科書編纂の関連性についても言及があれば、その教授観の背景がさらに明瞭になったはずである。

そのほか、形式や記述の問題として、先行研究の部分と本研究で新しく筆者が明らかにした部分とを峻別できていない部分がある。第3章の文法説明で、教科書の写真を提示しただけの箇所があり、これについて本文に説明が必要である。また、中国語の原文からの日本語訳に、誤訳と思われるところが散見される。図版(写真も含む)を多く取り入れていることから、図版の目次を入れることや凡例の工夫、張我軍の写真、年号の対照表を付けること、人物説明を付録に添付することなどが審査委員から提起された。

ただし、本論文が張我軍の日本語教育の教科書、『日文與日語』による多用なニーズに対応する教育活動を究明し、従来の不明を明らかにした功績は高く評価されるべきである。上述の不足点や未解決課題の指摘は、本研究が大きな到達点に至ったからこそ明らかになった視点であるといえる。このような期待を寄せることは、まさに隴を得て蜀を望む類の願望である。筆者の今後の一層の考究に期待が高まりこそすれ、本論文の学術的成果をいささかも損うものではない。

以上の点から、本審査委員会としては張我軍の日本語教育を解明し、大きな研究成果を導き出したものとして、本論文の意義を高く評価し、全員一致で博士学位を授与するに値する論文であると判定した。

なお、口述試験と論文本体を通じて、外国語能力は十分に保有すると判定した。